

西頸城地域における古代土器様相

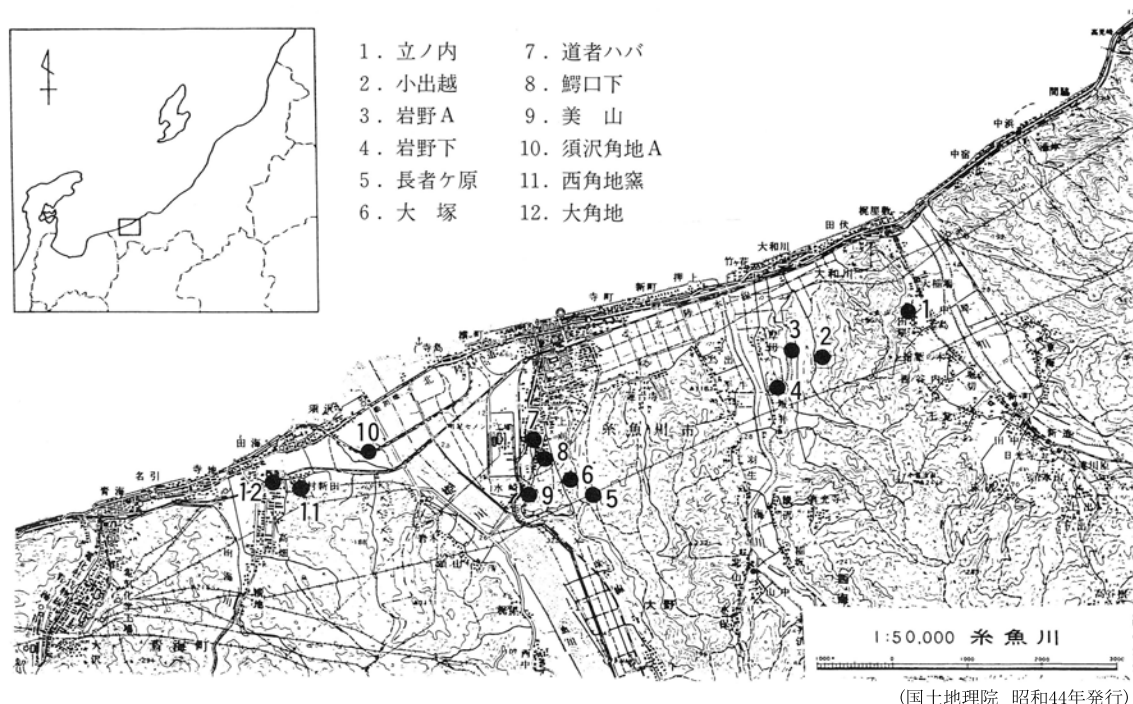
春日 真実

はじめに

「西頸城」とは新潟県の南西部に位置する糸魚川市・名立町・能生町・青海町の1市3町を総称する地域名称である。南は楠葉峠を越えて長野県と、西は親不知・子不知の峻嶲を越え富山県と、東は名立町の旧峻な山地を経て頸城平野に接し、北方は日本海に面する。山地や丘陵は海岸付近まで接近しており、平地に乏しく、山地・丘陵を縫うように南方の山々に源を発する姫川・早川などの急流河川が北流する。

当地域は、縄文時代から古墳時代にかけては姫川流域に産するヒスイ・滑石・蛇紋岩等を用いた玉類・石製模造品・磨製石器の製作が行われるなど、独自の生産活動みられた。また縄文時代の土器は、各時期を通じ北陸地方と共通した様相がみられる越後では唯一の地域である。

奈良・平安時代においては西頸城地域は頸城郡に属していたと考えられ、『和名類聚抄』に表われる沼川郷は当地に比定されている。当期には都と地方を結ぶために駅制が整備されたが、『延喜式』に記された越後の駅と駅馬の数は「蒼海8疋・、鶉石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸2疋」でありこのうち、蒼海・鶉石・名立の3駅は西頸城地域に存在したものと考えられ、蒼海駅が青海町青海、鶉石駅が能生町鶉石、名立駅が名立町大町周辺にそれぞれ比定されている。なお蒼海駅が8疋となっているのは越中国佐味駅が8疋となっていることとあわせ、親不知・子不知の峻嶲を越えなければならないためであろう。また『延喜式』神名帳に記された神社名—いわゆる式内社—は頸城郡のものとして13社が知られるが、このうち奴奈川神社・大神社・江野神社・円田神社・青海神社の5社は西頸城地域に存在したものと推測されている。



第1図 主要遺跡・位置図

以上のように、西頸城地域は三方を山に囲まれ、全面は日本海に面し、地理的な単元をなす地域であるとともに、東・西日本を繋ぎ、日本海側から中部日本へ至る交通の要衝として機能してきた。また、式内社が5社存在するなど頸城郡の中でも有力な地域であったと考える¹⁾。以下ではこのような西頸城地域の古代土器様相がどのようなものであったかみていきたい。

1 研 究 史

西頸城地域において発掘調査により古代の土器がまとまって検出されたのは1980年代後半からである。これ以前にも古代の窯跡採集資料や平安時代の竪穴住居出土土器についての報告と編年的な位置付けが行われていなかったわけではないが〔千家・山本1979・寺村1979など〕、これ以前と以後では資料の量に大きな隔りがある。1984～1986年にかけては北陸自動車道建設にともない糸魚川市周辺で多くの発掘調査が行われ、1986～1989年にかけて発掘調査報告書が刊行されている。

糸魚川市岩野A遺跡（以下岩野Aとする）では明確な堀込みは検出されなかったが、焼土の周辺から土師器無台碗・有台皿などの土器がまとまって検出された。報告では9世紀後葉から10世紀前葉の年代が与えられた〔高橋1986〕。

糸魚川市岩野下遺跡（以下岩野下とする）では奈良時代から平安時代かけての集落跡の調査が行われた。報告では出土した土器をa・bの2群に分類し、年代についてはa群を8世紀前葉、b群を9世紀後葉から10世紀前葉とした〔遠藤1987〕。

小出越遺跡（以下小出越とする）では土師器焼成遺構とそれに関する集落跡の調査が行われた。報告では出土土器について、2号住居出土土器（8世紀末～9世紀初頭）→4号住居出土土器（9世紀前葉）→1号住居出土土器（9世紀中葉）→3号住居出土土器（9世紀後葉）という変遷と年代が示された。また、土師器焼成遺構の構造に関する考察や、蛍光X線分析による土師器の胎土分析も行われ、周辺遺跡出土の土師器との対比から小出越遺跡で生産された土師器の流通についても検討が行われている〔鈴木1988〕。

糸魚川市鰐口下遺跡（以下鰐口下とする）・同市美山遺跡（以下美山とする）では平安時代の集落跡が調査され、定量の土器が出土した。土器の年代については、報告では鰐口下については9世紀後葉から10世紀、美山については10世紀に主体を置くものとした。また非ロクロ成形の土師器甕について検討が行われ、頸部から口縁部にかけて屈曲するものは9世紀以降は確認できなくなり、以後寸胴のものが主体になることが指摘されている〔鈴木1989〕。

1987年には須沢角地A遺跡（以下須沢角地とする）の土地区画整理事業にともなう調査が行われ、翌1988年には報告書が刊行された〔土田・小池・中村1988〕。報告では大量の竪穴住居出土土器を基に7世紀末から10世紀の土器編年が示された。

このほか、坂井秀弥氏は、頸城地域における平安時代の土器編年を行ない、小出越2号住居出土土器を8世紀末～9世紀初頭、同3号住居出土土器を9世紀前葉、同1号住居出土土器を9世紀後葉に位置づけている〔坂井1991〕。

また、望月精司氏は北陸地方の土師器生産遺構を検討する中で、小出越遺跡の土器生産体制について考察を行っている〔望月1997b〕。

以上のように西頸城地域の古代の土器に関しては1980年を中心として研究の蓄積がある。特に『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』で示された土器編年（以下須沢角地編年とする）は、西頸城地域における古代土器編年の現状での到達点を示すものであろう。ただし、須沢角地編年は9世紀前葉～10世紀の資料が少

ないという制約がある。一方北陸自動車道建設にともない調査した遺跡については、9世紀前葉から10世紀の資料が多く見られるものの、須沢角地編年との対応関係や9世紀前葉から10世紀にかけての土器の変遷が十分に検討されず現在に至っている。また土器生産遺跡の系譜や土器の生産体制については、わずかに鈴木・望月氏の検討があげられるにすぎない。

以下ではこれらの点に留意しつつ、西頸城地域における7世紀後葉末～11世紀前後の土器の変遷を明らかにし、次いで他地域との比較から西頸城地域の地域性についてもふれてみたい。

2 土器編年の概要

7世紀後葉ころから11世紀前後の土器について4期11小期に分ける。以下第2～5図に沿って土器編年の概要を記述する。

I期（7世紀後葉から8世紀後葉）：西頸城地域では須恵器生産は行われていないが須恵器が一定量確認できるようになる時期。在地で生産された非ロクロ成形の土師器・黒色土器とともに須恵器が食膳具の一端を担うようになる。須恵器食膳具の量比や形態変化からI-1期～I-4期の4小期に細分した。当期は、須沢角地と岩野下に良好な資料があり、I-1期の資料としては須沢角地S I 112・219、I-2期は須沢角地S I 113・119、I-3期は須沢角地S I 202、I-4期は須沢角地S I 218をあてる²⁾。また岩野下S K 12はI-4期、旧河道および包含層出土遺物のうち遠藤氏がa群としたものの大半はI-4期を中心とし、前後の時期の遺物を定量含むものとする（第6図）。

食膳具はI-1期には非ロクロ成形の土師器・黒色土器が須恵器の量を上回る。須恵器は内面に返りのある杯蓋が定量あり、無台杯は口径11cm前後の小型のものが主体を占める。I-2期は食膳具が少なく詳細は不明だが、口径16～17cm前後の須恵器有台杯、口径13cm前後の大型化した須恵器無台杯が確認できる。I-3期は定量の須恵器が確認できる。須恵器食膳具は、頂部にロクロケズリを行い偏平な鈕と長く屈曲する口縁端部をもつ杯蓋、口径13cm前後の低平な無台杯、口径14cm前後で外側に踏ん張る形態の高台を持つ有台杯が確認できる。ただし須沢角地S I 202では須恵器と非ロクロ成形の土師器（黒色土器を含む）の比率は2：3前後で依然として非ロクロ成形土師器が多い。I-4期に比定する須沢角地S I 218、岩野下a群は食膳具の8割以上を須恵器が占めるようになる。非ロクロ成形の土師器・黒色土器は高杯などを中心に少量確認できる程度となる。

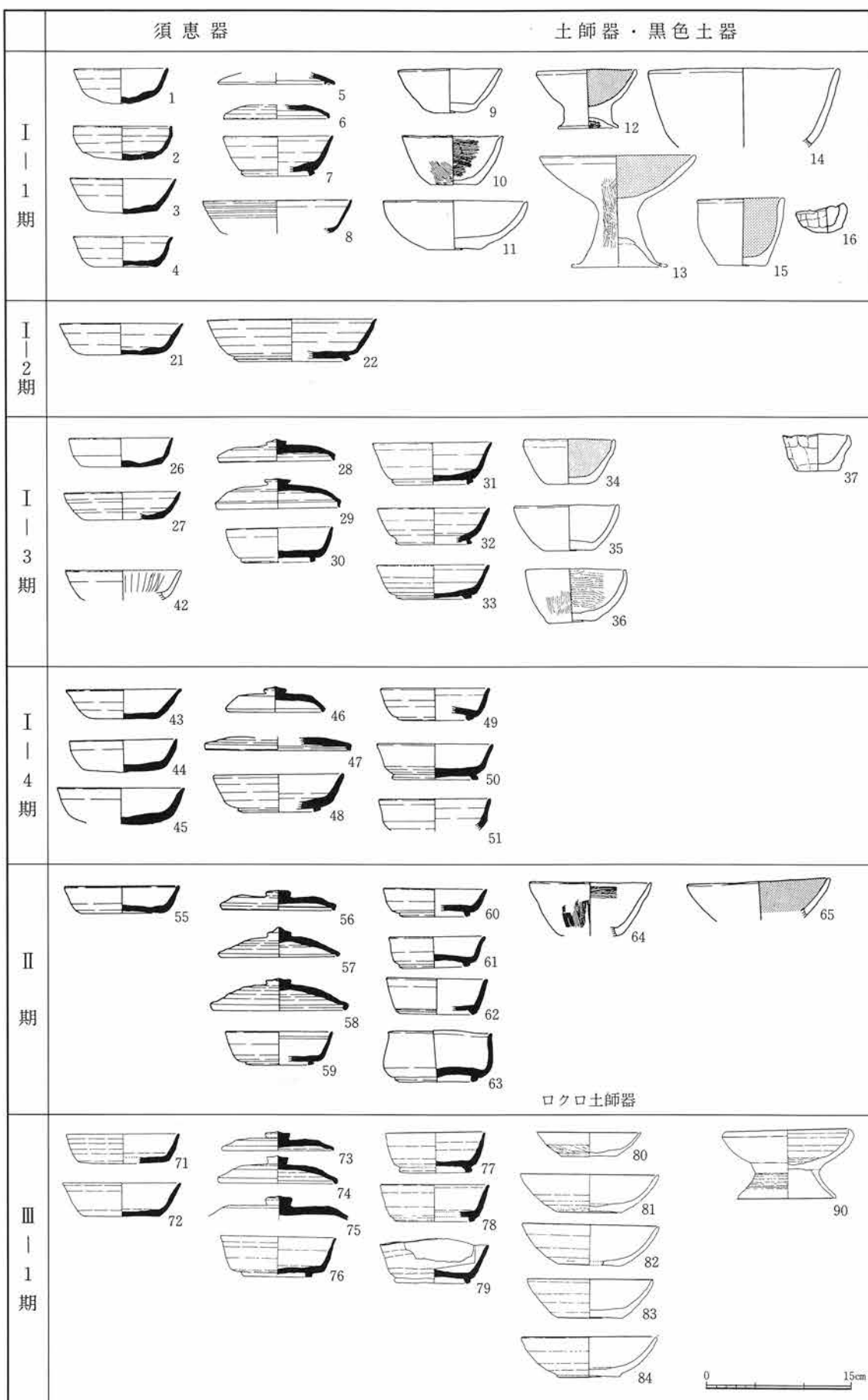
煮炊具は主に非ロクロ成形の土師器で占められ、平底の長胴甕と小甕がI期を通じ確認できる。長胴甕はI-1期からI-2期にかけて底径が大型化し、I-3期以降口縁部から頸部にかけての屈曲が明確でなくなる。またI-4期にはロクロ成形の小甕が確認できる。甕は須沢角地S I 113などで底部が多孔となるものが確認できるが安定して存在する器種ではない。

貯蔵具については不明な点が多いが、非ロクロ成形で、「く」字口縁、倒卵型の体部で平底となる土師器壺がI-2期ないしはI-3期までは確認できる。

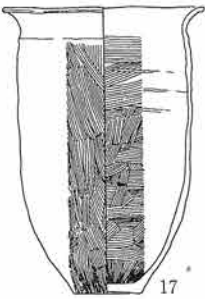
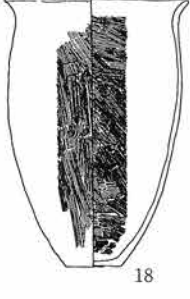
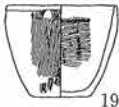
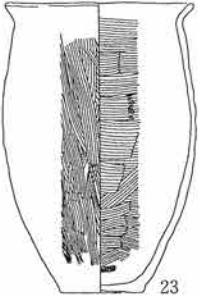
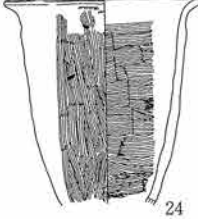
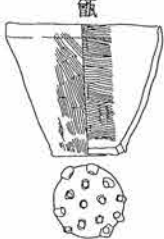
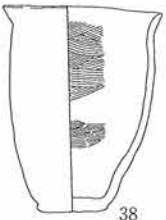
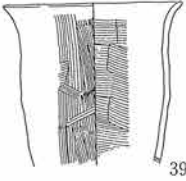
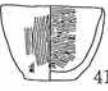
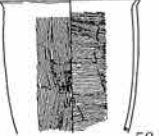
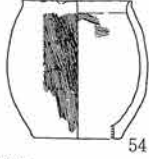
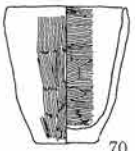
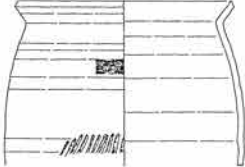
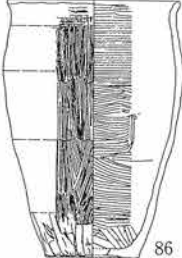
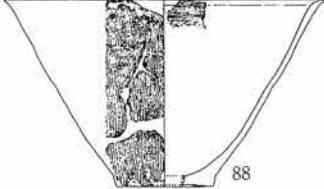
II期（8世紀末～9世紀初頭）：西頸城地域において須恵器生産が開始され、定着していく時期。2期に細分できるものとするが、良好な資料が存在しない。青海町西角地窯跡（以下西角地窯とする）、須沢角地S I 223・204C・215は当期のものとする。

食膳具は須恵器が大半を占め非ロクロ成形の土師器・黒色土器はほとんど確認できなくなる。須恵器杯蓋・有台杯はI-3・4期に比べ小型となる。また有台杯は深身のものが一定量存在する。

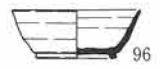
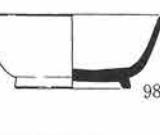
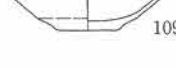
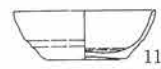
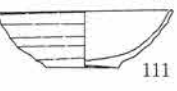
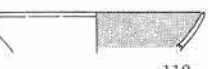
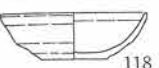
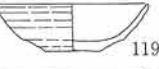
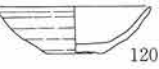
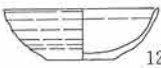
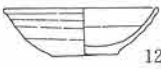
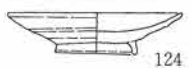
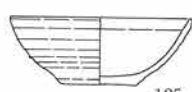
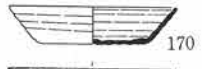
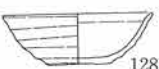
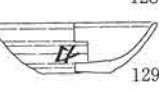
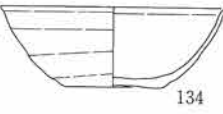
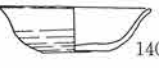
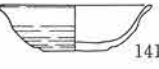
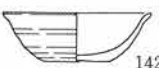
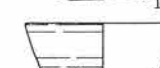
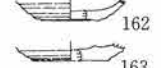
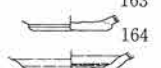
煮炊具においても西角地窯では須恵器技法を用いて製作されたものが定量存在し、鍋も確認できる（第



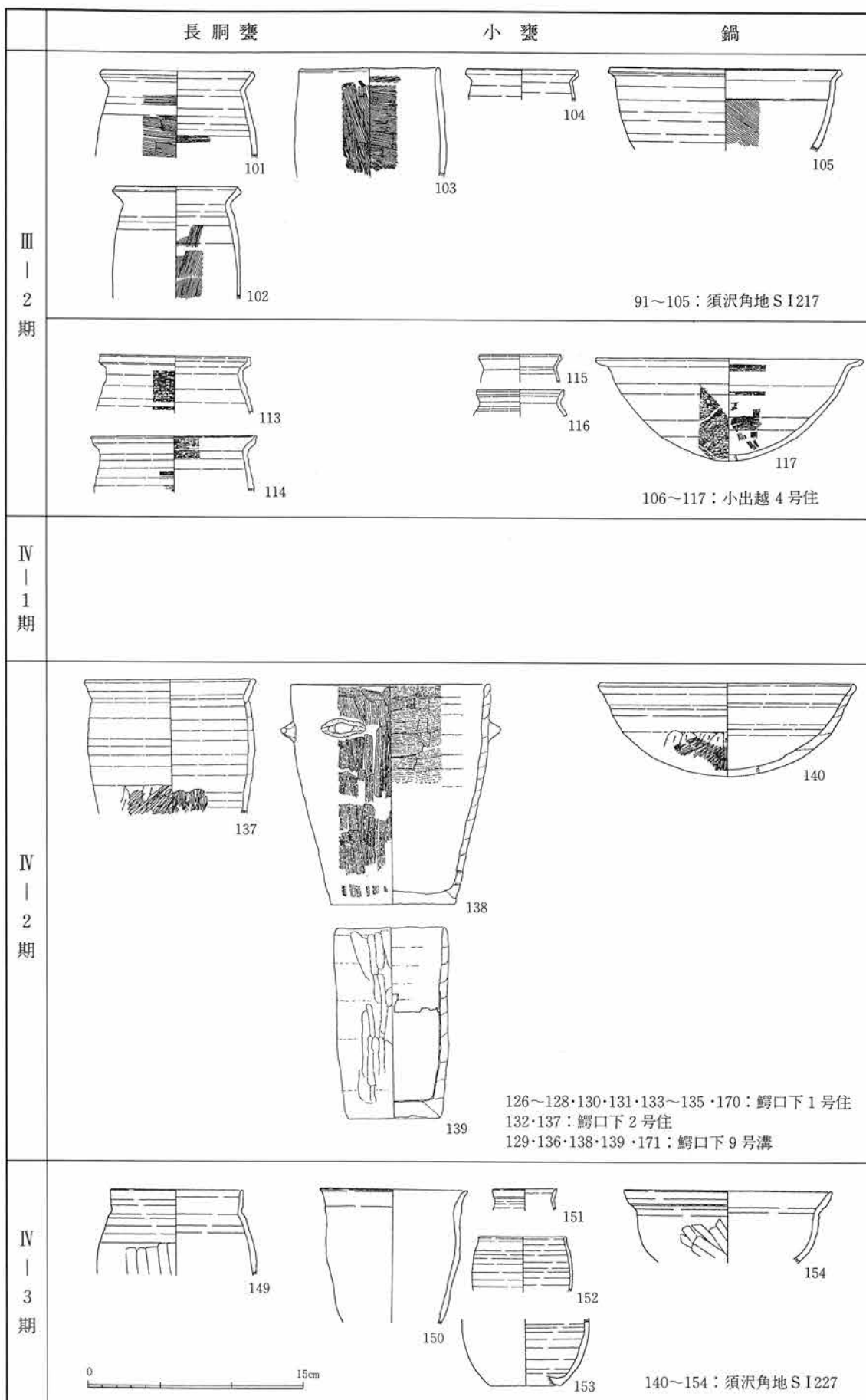
第2図 土器変遷図(1)

	長 胴 甕	小 甕
I 1 期	 	  1～12・14・16・18～20：須 沢角地 S I 219 13・15・17：須沢角地 S I 112
I 2 期	 	 21～24：須沢角地 S I 119 25：須沢角地 S I 113
I 3 期	 	  26～42：須沢角地 S I 202
I 4 期		   43～54：須沢角地 S I 218
II 期	 	   55～65・70：須沢角地 S I 223 66～68：須沢角地 S I 204 C 69：須沢角地 S I 215
III 1 期	 	   71～89：小出越 1 号住

第 3 図 土器変遷図(2)

	須恵器	土師器・黒色土器
Ⅲ 2 期	 91  92  93  94  95  96  97  98	 99  100  106  107  108  109  110  111  112
Ⅳ 1 期	小泊産須恵器 118~125: 岩野 A S X 14	 118  119  120  121  122  123  124  125
Ⅳ 2 期	 170  171	 126  127  128  129  130  131  132  133  134
Ⅳ 3 期		 140  141  142  143  144  145  146  147  148
Ⅴ 期	 155  156  157  158 	 159  160  161  162  163  164  165  166 両面黒色  167 両面赤彩  168  169 155~169: 美山

第4図 土器変遷図(3)



第 5 図 土器変遷図(4)

7図20)。ただし消費遺跡では非ロクロ成形の長胴甕・小甕も一定量存在する。

Ⅲ期（9世紀前葉～9世紀後葉）：食膳具にロクロ土師器が定量確認できるようになる時期。また当期には少量だが佐渡小泊窯産須恵器も確認できる。須恵器・土師器食膳具の形態から2小期に細分した。当期は小出越・須沢角地に資料がある。Ⅲ-1期は小出越2・4号住、Ⅲ-2期は須沢角地A S I 217・小出越1号住居をあてる。

小出越2号住居出土土器（第9図）については、8世紀末～9世紀初頭に比定する意見があった〔鈴木1988・坂井1991〕。これは2号住居の土師器無台碗の体部下半に手持ちケズリを行なうものが定量存在し、4号住居に先行する要素と捉えられたためであろう。しかし、共伴した須恵器蓋はいずれも鈕が小型であり、有台杯の高台も細身で退化したものが定量見られ、4号住居出土の須恵器と大差なく、9世紀前葉まで下るものであろう。また須恵器技法による長胴甕の口縁端部の形態についても、ともに内傾する面を持つものや、上方にわずかに屈曲するものが主体を占め、共通性が見られる。4号住居出土の土器よりも2号住居出土の土器が先行する可能性が高いにしても、両者はおそらく近接した時期のもので、ともにⅢ-1期の中に納まる資料と考える。土師器無台碗は口径13～14cm、器高3.5cm、底径6～7cm前後の、大型・浅身で底径の大きいものが多い。

Ⅲ-2期は、須恵器ではⅢ-1期に比べ杯蓋の端部の屈曲が短くなり、有台杯は小型化する。土師器無台碗の口径は13～14cm、器高は3.5cm前後とⅢ-1と大差ないが、底径は6cm前後のものが多く、小型化する。また器高4cmを超える深身のものも一定量確認できるようになった。

なお小出越1号住居は須沢角地S I 217に比べ土師器食膳具が多いが、これは小出越遺跡に土師器焼成遺構が存在することと関連があるものと考ええる。

煮炊具は須恵器技法を用いたものが増加し、非ロクロ成形のものはさらに減少する。またⅢ-2期の長胴甕には口縁端部が上方に長く屈曲するものが確認できる。鍋は組成として定着する。

Ⅳ期（9世紀末～10世紀前葉） 在地産の須恵器が確認できなくなり、ロクロ土師器無台碗を中心とした食膳具の構成となる時期。佐渡小泊産須恵器と黒色土器も確認できるが、その量はわずかである。また煮炊具は大幅に減少する。

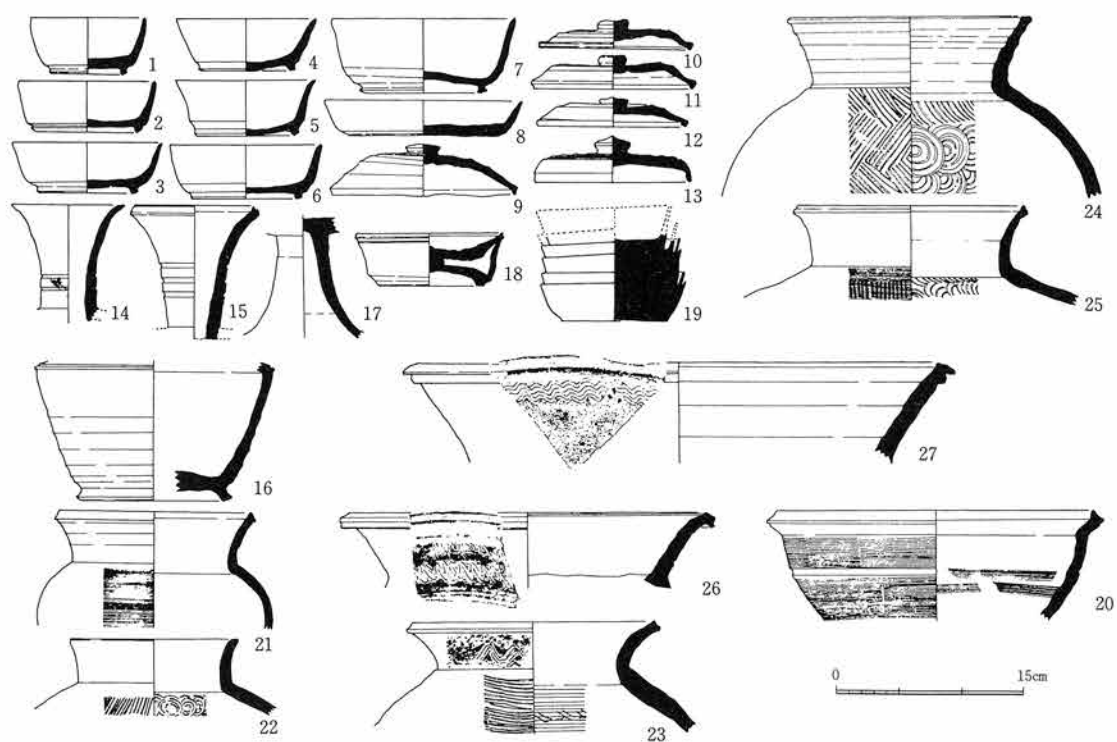
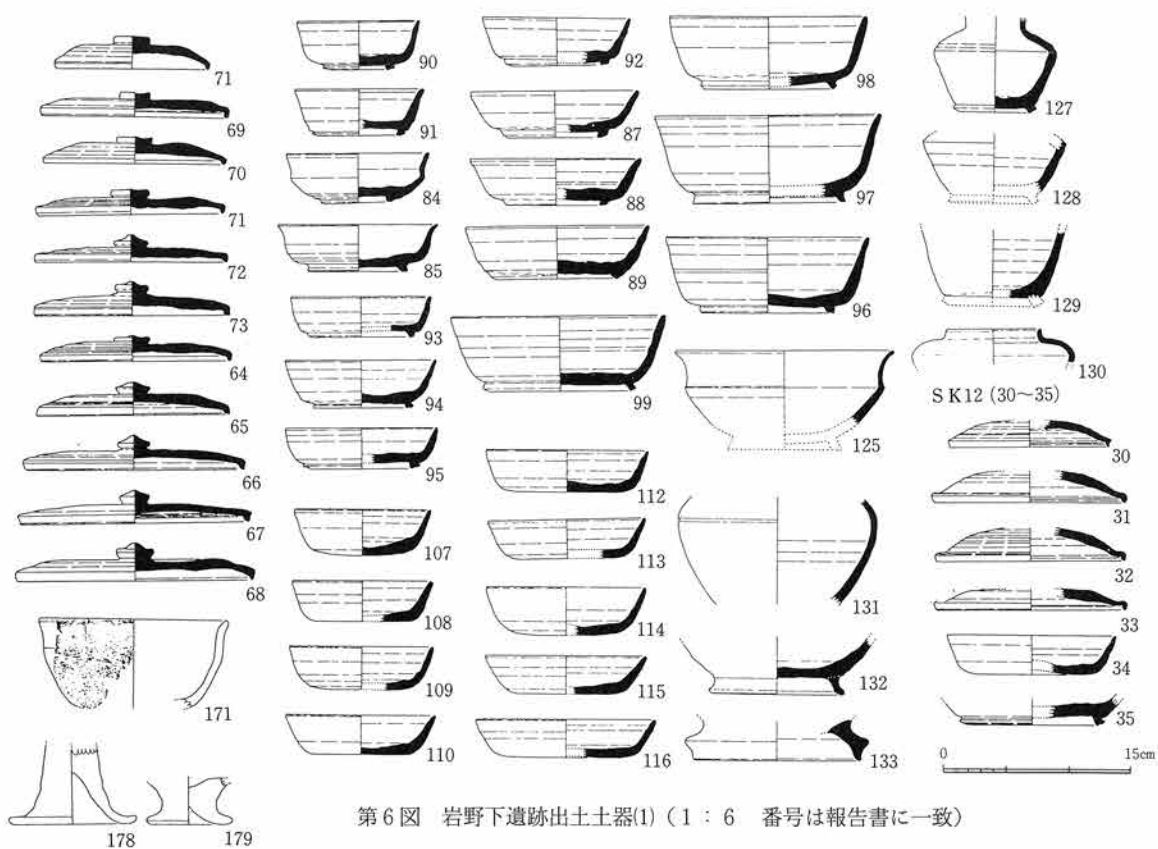
当期は岩野A・鰐口下・須沢角地・岩野下に資料があり、Ⅳ-1は岩野A S X14、Ⅳ-2期は鰐口下1・2号住居・9号溝、Ⅳ-3期は須沢角地S I 227、岩野下S K 1・15・S B 5遺構内焼土周辺出土土器をあてる³⁾。

土師器無台碗の形態をみるとⅣ-1期は口径12cm、器高4cm、底径4.5cm前後とⅣ-2期に比べ口径・底径は小型化し、若干深身となる。Ⅳ-2期は口径・器高についてはⅣ-1期と大差無いが、底径は5cm前後とやや大きくなる。Ⅳ-3期は口径13cm、底径5～6cm前後と口径・底径がやや大型化する。

煮炊具は出土例が少なく不明な点が多いが、長胴甕・小甕・鍋が確認できる。Ⅲ期と同様に須恵器技法を用いたものが主体を占めるが、非ロクロ成形で寸胴の長胴甕も確認できる。

Ⅴ期（10世紀後葉） 食膳具からは須恵器が確認できなくなり、粗雑な造りの土師器無台碗・小碗・小皿を中心に食膳具が構成される時期。報告書資料が少なく、不明な点が多いが美山出土土器がある。美山出土の土師器は口径10～11cm前後の小碗、口径13～14cm前後の無台碗、両面黒色処理・赤彩を行なった有台皿等が確認できる。

これ以後の土器様相については不明な点が多いが、岩野下出土土器の一部の土器群（第9図）は11世紀前葉を前後する時期のものであろう⁴⁾。

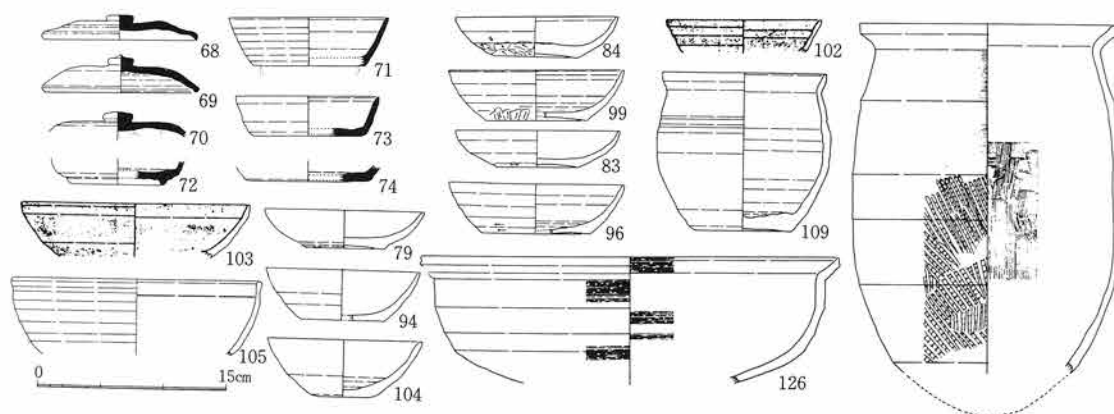


なお、頸城平野の土器群との平行関係については、Ⅰ－Ⅰ期には良好な資料が存在しないが、Ⅰ－Ⅱ期は栗原遺跡S D25ないしはこれより若干先行する時期、Ⅰ－Ⅲ期は今池編年〔坂井1984〕のⅠ期（A地区包含層）、Ⅰ－Ⅳ期は同Ⅱ期（SK24）から同Ⅲ期（SK21A・B）⁹²、Ⅱ期は同Ⅳ期（SK257・SK102）、Ⅲ－Ⅰ期は同Ⅴ期（SD201）、Ⅲ－Ⅱ期はⅤ期からⅥ期（SD3）の古相、Ⅳ－Ⅰ期はⅥ期（SD3）の新相、Ⅳ－Ⅱ期は一之口遺跡（西地区）SE183・SD188、Ⅳ－Ⅲ期は一之口遺跡（西地区）SE153、Ⅴ期は四ツ屋遺跡SE25ないしはこれに後続する時期、岩野下b群の一部は一之口遺跡（東地区）SD1'と概ね平行する時期と考える。

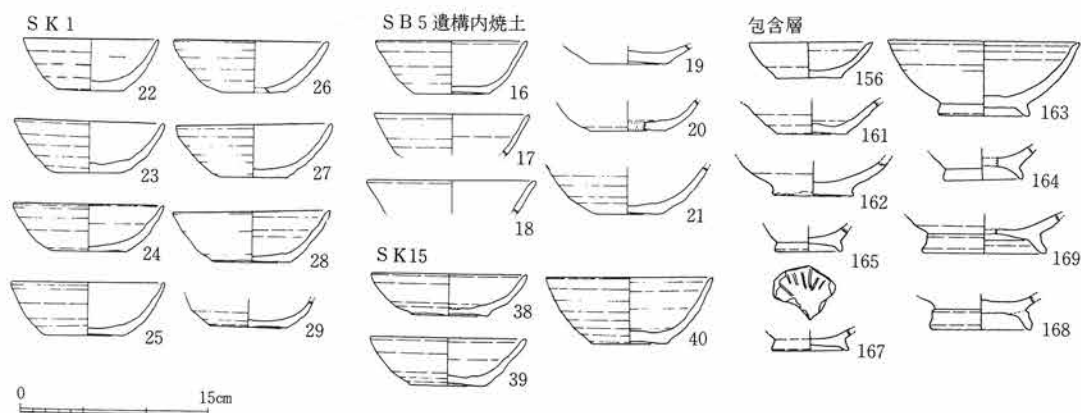
3 西頸城地域の地域性

次に上記の編年に基づき、周辺地域との比較から、西頸城地域の古代土器の地域性を時期をおって明らかにし、その意味するところも考えてみたい。

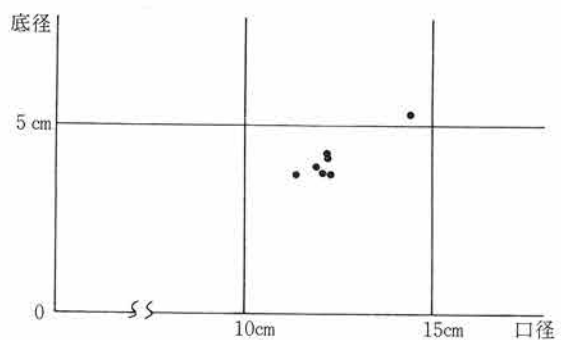
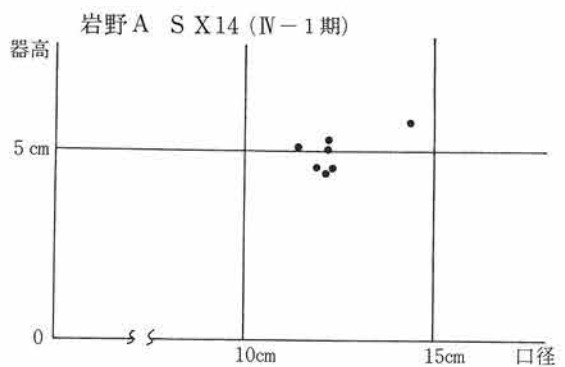
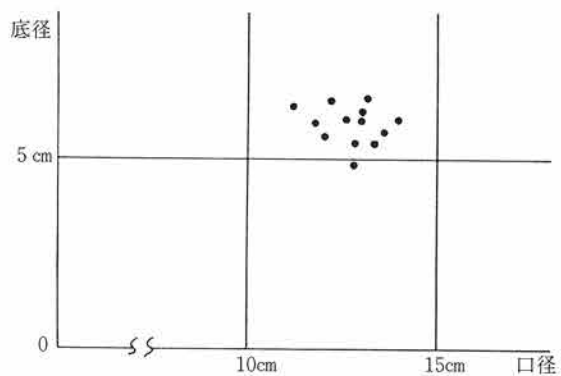
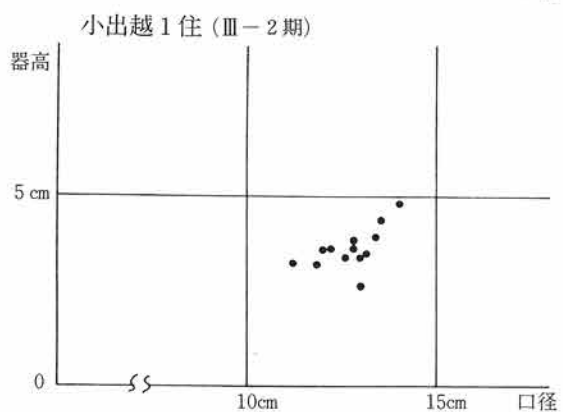
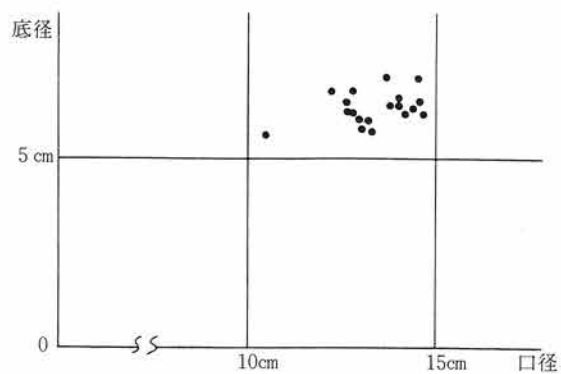
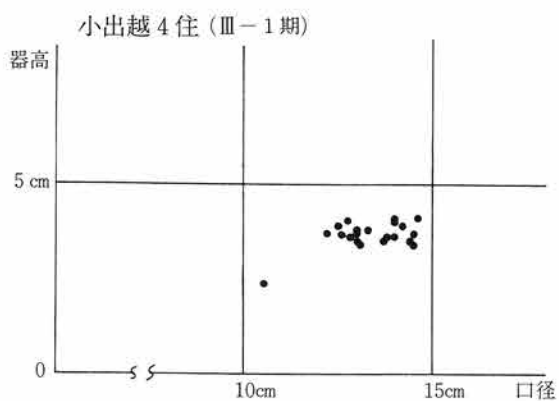
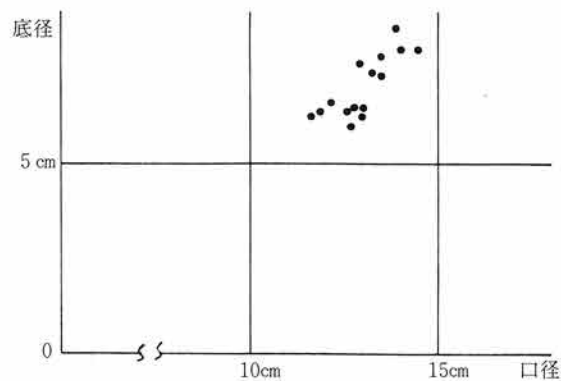
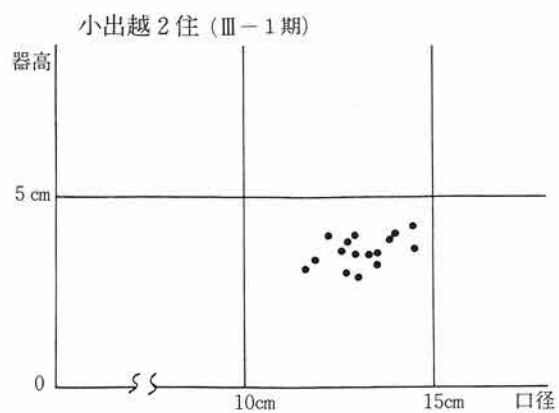
越後の多くの地域では7世紀後葉から8世紀初頭にかけて須恵器窯が成立し、食膳具は土師器から須恵器に急速に転換するが、西頸城地域では8世紀前葉までは非クロロ成形の土師器（黒色土器を含む）が一定量存在する。また煮炊具も8世紀前葉頃には須恵器技法を用いた長胴甕・小甕・鍋がかなり普及するが、西頸城では8世紀後葉までは非クロロ成形で平底のものがほとんどである。器種も主に長胴甕・小甕で構成され、鍋は確認できない。なお、Ⅰ期の須恵器は、岩野下出土のⅠ－Ⅲ期～Ⅰ－Ⅳ期の須恵器の観察によれば大半が頸城平野で生産されたものと思われる。



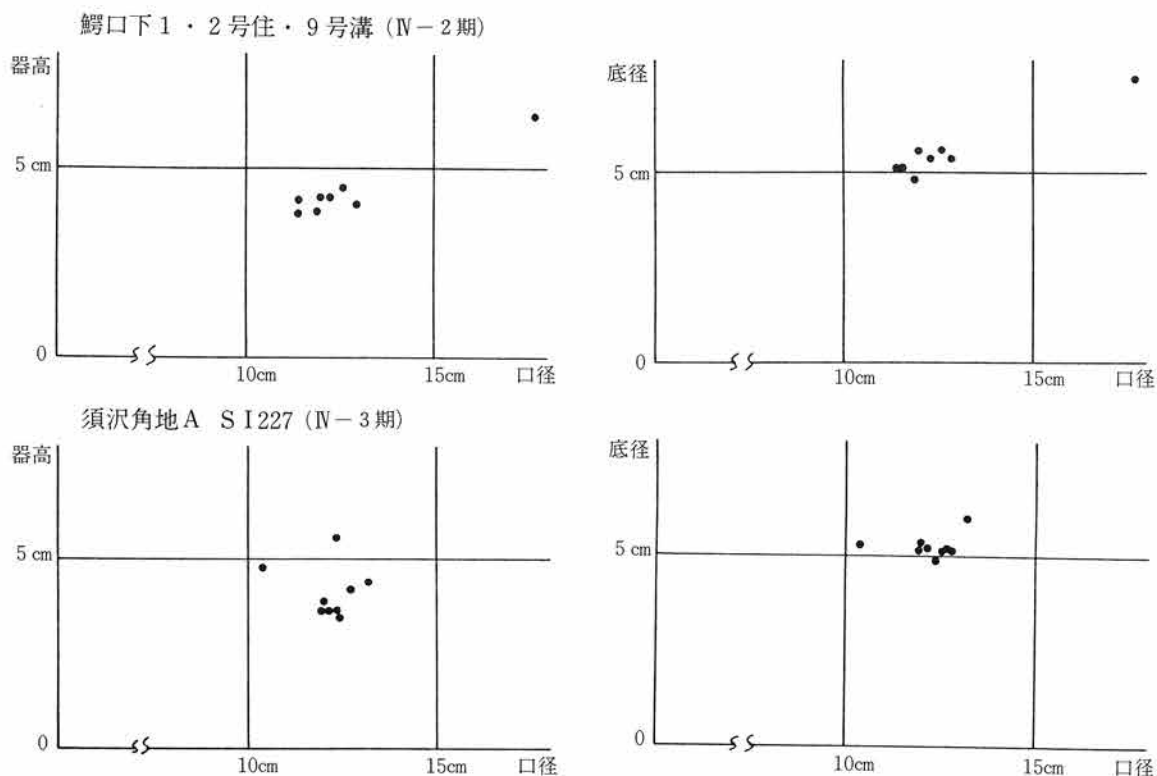
第8図 小出越遺跡2号住居出土土器（1：6 番号は報告書に一致）



第9図 岩野下遺跡出土土器(2)（1：6 番号は報告書に一致）



第10図 土防器無台碗・黒色土器無台碗の口径・器高・底径(1)



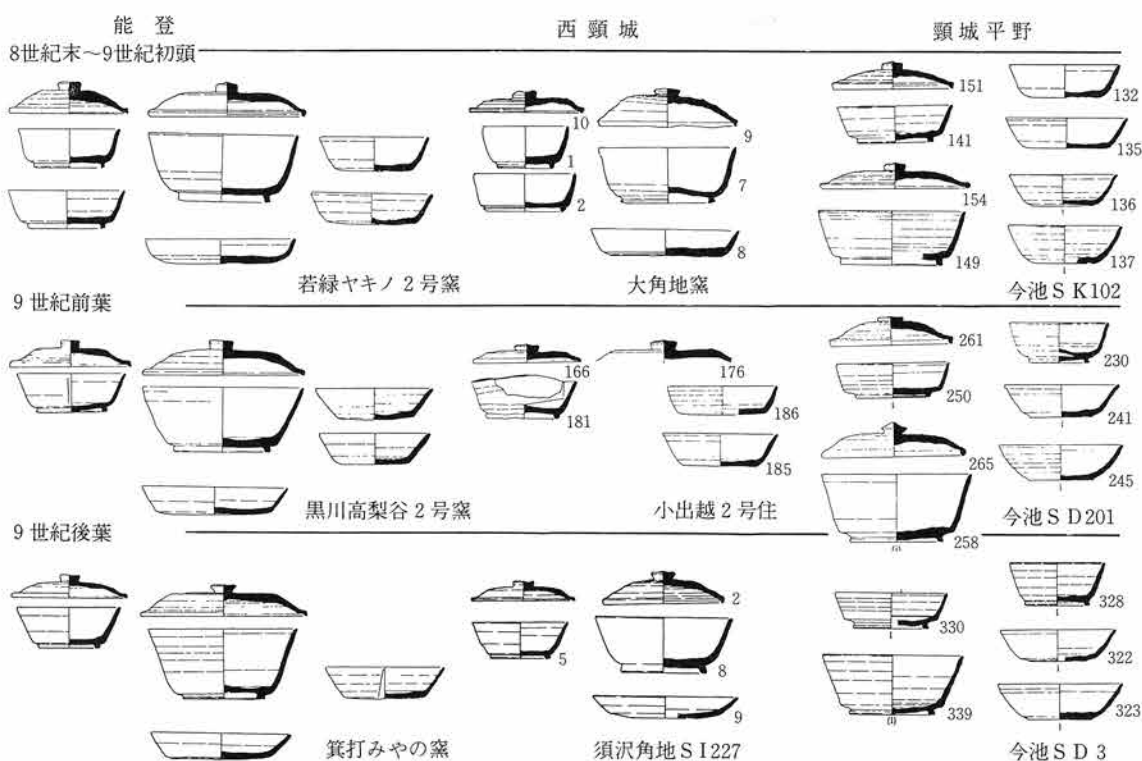
第11図 土師器無台碗・黒色土器無台碗の口径・器高・底径(2)

8世紀末～9世紀初頭前後には西角地窯で須恵器生産が確認できる。西角地窯で生産された須恵器は越後以西の北陸地方で生産された須恵器と共通点が多く、これ以後西頸城地域で生産された（と思われる）須恵器も同様な傾向が窺える⁹⁾。一方、頸城平野で生産される須恵器は8世紀後葉以降、東海・信州の影響が強い〔坂井1988〕（第12図）。西頸城地域における須恵器窯の開窯にあたっては、同一郡内の頸城平野ではなく、北陸地方の工人の関与により成立した可能性が高い。これは西頸城地域の須恵器生産の開始に際し、頸城郡の郡司ではなく、奈良・平安時代以前から北陸地方との交流があったと思われる西頸城地域の在地首長層がより大きな役割を果たした結果であろう。また、当期には須恵器技法を用いた土師器煮炊具が普及するが、非ロクロ成形の土師器煮炊具も依然として存在する。西頸城地域においては、煮炊具が消滅する10世紀後葉頃までは非ロクロ成形の土師器煮炊具は一貫して生産されており、9世紀代には非ロクロ成形の土師器煮炊具はほとんど確認できなくなる越後の他地域とは異なった様相である。非ロクロ成形の土師器は胎土中に円礫を定量含む古墳時代の土師器に類似した胎土が見られ、須恵器窯成立以後も古墳時代的な土器生産体制が併存した可能性が高い。

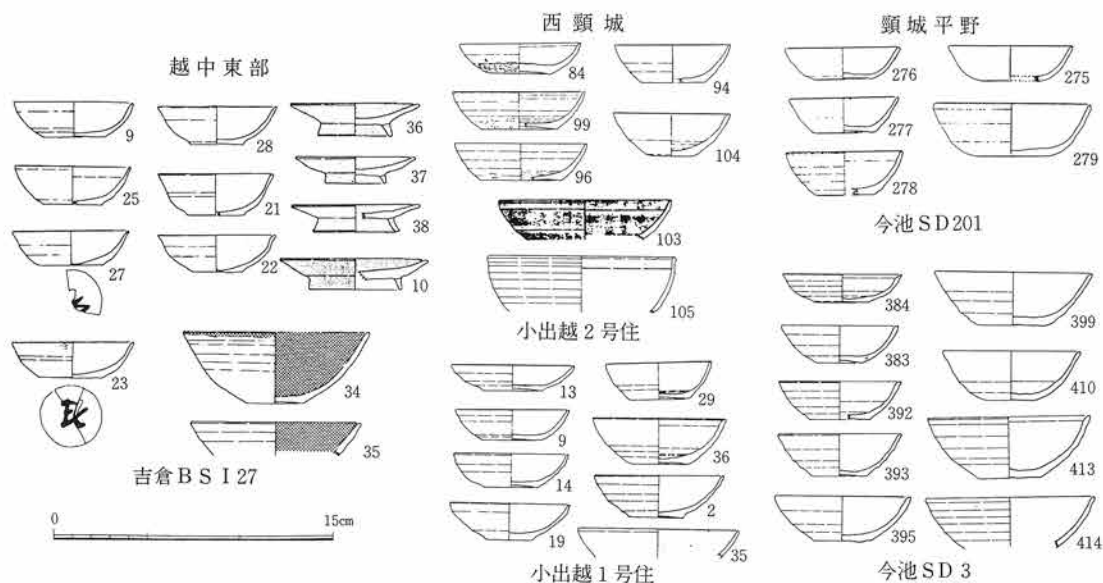
9世紀前葉にはロクロ成形の土師器食膳具が生産されるようになるが、9世紀後葉頃まで器高指数25～28前後の身の浅い無台碗が主体を占める。これは器高指数30～35前後のものが大半の越中東部や、器高指数25～28前後のものは存在しても量的に多くない頸城平野〔出越1997〕とは異なった様相である（第13図）。小出越に主体的に存在する身の浅い無台碗の系譜については不明な点が多いが、最も古相の1号住居出土土器は、その器形や底部付近に手持ちケズリがみられる点などから東北地方南部に見られる黒色土器と関連する可能性がある。また小出越で検出されている土師器焼成遺構は平面が不整形で、断面が皿形の浅い土坑状のことが多い。このような形態の土師器焼成遺構は、北陸地方に少ない〔望月1997〕ことも、小出越の土師器生産が北陸地方以外の技術系譜によることを示しているものと考えられる。

なお、小出越・岩野A・岩野下・鰐口下・立ノ内遺跡・大塚遺跡・原山遺跡（以下立ノ内・大塚・原山とする）出土の土師器については三辻利一氏により胎土分析が行われている。それによれば小出越領域の土師器は、早川と海川にはさまれた台地上に位置する岩野A・立ノ内・岩野下ではいずれも出土しており、姫川流域の鰐口下・原山・大塚では、大塚でのみ検出されており、他の2遺跡では検出されていない。おそらく、土器を主体的に供給したのは数km程度の狭い範囲と考えられる。9世紀前半以降は小規模な土師器生産地が西頸城地域の中に複数成立した可能性が高い。

また、9世紀後葉以降に土師器食膳が増加するのは越後における一般的な傾向であるが、9世紀後葉から10世紀前葉にかけて、他地域よりも土師器食膳具の比率が高く、須恵器・黒色土器の比率が低い点も西頸城地域の特徴の1つとしてあげられよう。



第12図 8世紀～9世紀後半の須恵器の変遷⁷⁾ (1:8)



第13図 9世紀後葉前後の土師器・黒色土器食膳具⁸⁾ (1:8)

4 ま と め

以上のように古代の西頸城地域は、8・9世紀を通じて非ロクロ成形の土師器煮炊具が確認できるなど越後の他地域とは異なった土器様相が見られた。これは頸城郡の中核から離れた地域の後進性と捉えるべきものではなく、奈良・平安時代以降も一定の勢力を持ちえた地域の独自性の発現と見るべきものであろう。今後はこうした独自性を保持しえた社会的・経済的な背景がなんであったかを解明する必要がある。

またこのような土器様相は古墳時代以来の土器生産体制が残存した結果と考えたが、こうした地域において9世紀前葉以降に小規模な土師器生産遺跡が複数成立し、須恵器食膳具から土師器食膳具への転換が他地域よりも急速に達成された点は興味深い。

以上、西頸城地域の土器編年・地域性について述べてきた。ここで示した編年の概要は須沢角地編年を大きく越えるものではなく、西頸城地域で調査を行った方には周知のことかも知れない。本稿は当初土器生産体制や流通についても述べるつもりであったが、筆者の力量不足から十分成しえなかった。再度検討を試みたい。

本稿が成るに当たっては以下の方から多くの御教示を受けた。文末ながら記して感謝いたします。

飯坂盛泰・木島 勉・木立雅朗・北野博司・坂井秀弥・笹沢正史・鈴木俊成・高橋 勉・寺崎裕助・望月精司・山岸洋一・渡辺尚紀（五十音順）

註

- 1) 頸城郡衙については新井市栗原遺跡周辺とする説が有力である。また『倭名類聚抄』によれば越後国府は頸城郡に所在することが記されており、これについては今池遺跡・子安遺跡・下新町遺跡周辺とする説が有力である。
- 2) 未報告だが道者ハバ遺跡出土の土器にはⅠ－Ⅲ期に平行するものが定量存在する。
- 3) 未報告資料であるが、長者ヶ原遺跡湧水地点から出土した近江系緑釉陶器と共伴する土師器はⅣ－Ⅲ期か、これよりやや後続する時期のものとする。
- 4) 未報告資料であるが長者ヶ原遺跡湧水地点堅穴状遺構出土の土器は12世紀ころのものとする。
- 5) 今池編年Ⅰ期は8世紀初頭ころに比定されていたが〔坂井1984〕、8世紀前葉ころに比定したほうがよいことを笹沢正史氏より教示を受けた。
- 6) この点については坂井秀弥氏より多くの御教示を受けた。
- 7) 能登については、〔川畑1992〕・〔折戸・川畑1996〕より。他は各報告書より転載、番号は各報告書に一致。
- 8) 各報告書より転載、土器の番号については報告書に一致。

引用・参考文献

- 池野正男 1997「越中における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
糸魚川市 1976『糸魚川市史1』
糸魚川市 1986『糸魚川市史資料集1－考古編』
折戸靖之・川畑 誠 1994「高松・押水窯跡群における8世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
遠藤孝司 1987「まとめ」『岩野下遺跡』新潟県教育委員会
遠藤孝司・高橋保雄・和田寿久 1987『岩野下遺跡』新潟県教育委員会
春日真実 1992「越後・佐渡における須恵器生産の終末」『北陸古代土器研究』第2号 北陸古代土器研究会
春日真実 1997「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
金子拓男 1996「越後国分寺の寺地の所在とその変遷について」『新潟考古』7号 新潟県考古学会
川畑 誠 1992「能登における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』第2号 北陸古代土器研究会
木村宗文 1984「文献からみた古代・中世の頸城」『今池・下新町・子安遺跡』新潟県教育委員会
酒井重洋ほか 1994『吉倉B遺跡』富山県埋蔵文化財センター
坂井秀弥 1983「越後における7・8世紀の土器様相と画期について」『信濃』第34巻第4号 信濃史学会

- 坂井秀弥 1984「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『今池・下新町・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989「まとめ」『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会他
- 坂井秀弥 1991「越後平安期土器編年素描」『東国土器研究』3号 東国土器研究会
- 坂井秀弥 1993「上越市今池遺跡国府説・本長者ヶ原廃寺国分寺説の現状」『新潟考古学談話会会報』第11号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥・戸根与八郎他 1984『今池・下新町・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1986『一之口遺跡（西地区）』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成 1988「まとめ」『小出越遺跡』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成・遠藤孝司 1988『小出越遺跡』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成 1989『鰐口下遺跡・美山遺跡』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成ほか 1994『一之口遺跡（東地区）』新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田嶋明人 1987「古代土器の編年軸設定」『篠原遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 高橋 保 1986「岩野A遺跡」『中原・岩野A・岩野B遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋 勉 1995「頸城地方の官衙関連遺跡」『新潟考古』5号 新潟県考古学会
- 高橋 勉 1997「栗原遺跡とその周辺」『第23回古代城柵官衙検討会資料』古代城柵官衙検討会
- 土田孝雄・小池義人・中村恵美子 1988『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』新潟県青海町教育委員会
- 出越茂和 1997「北陸古代後半における碗皿食器（前）」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 寺村光晴ほか 1979『大角地遺跡』新潟県青海町教育委員会
- 千家和比古・山本 肇 1979「西角地窯跡」『大角地遺跡』新潟県青海町教育委員会
- 中村恵美子・秦繁治 1988『四ツ屋遺跡発掘調査報告書』四ツ屋遺跡調査団
- 望月精司 1997a「北陸における古代土器生産体制の変質と展開」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 望月精司 1997b「北陸」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会